

美味しく食べてくれる家族がレシピを磨いてくれていることに気がついた。毎日のご飯と家族に感謝ですね。

山内裕子

新会員紹介

梅津純子（うめつ すみこ）……………一九四三年（昭和十八）、東京生まれ。翌四四年、空襲が迫り父の実家のある宮城県登米郡錦織村（現 登米市）へ移る。一九六一〜六九年春、仙台市にて銀行勤め。六九年、結婚により米沢市へ。七一年より長井市在住。所属は山形県歌人クラブ、山麓。歌集に『風の旅』がある。

編集後記

◆新会員の梅津純子さんの作品は短歌である。久しぶりに頂戴したメールの題は「がんもどき」。が、よく読んでみると「癌もどき」の壮絶な、しかも信じられないような体験が書いてあった。歌にするのは自信がないとの口ぶりだったが、直球でもなんでも、とにかく作品に仕上げることを勧めた。

短歌は自己に対する慰藉いしやでよいのか、という議論が古くからなされてきた。短歌はあくまで創作であるから、事実とは限らない。ゆえに、短歌イコール作者の経験という読みは必ずしも当てはまらない。しかし、時には、作品に昇華させることで個々のやり切れない感情を乗り越えることができる。このことは、短歌の効用といっても差し支えない。

短歌の虚構性で有名なのは寺山修司である。母親は生きているのに、すでに母が亡くなったものとして描いたり、いないはずの弟が登場したりしている。最近では、父の死を詠んだ連作「父親のような雨に打たれて」で第57回短歌研究新人賞を受賞した（二〇一四年七月）石井僚一。実際には彼の父親は存命で、祖父の死を父に置き換えた作品だった。受賞後、作中の「父の死」が虚構であるとして論争になった。「短歌研究」十月号に選考委員のひとりである加藤治郎の「虚構の議論へ

第57回短歌研究新人賞受賞作に寄せて」が緊急掲載され、「虚構の動機が分からないのである。…と、この事実を選考前に知っていたらどうだったのか等も論議を呼んだ。また、「とてつもない嘘を詠むべし？」や「「作中人物の死が虚構であるかどうかは、現実のレベルの問題であって、テキストの価値のレベルではない…」等の時評もあり、短歌誌の年末の座談会でも取り上げられるほどだった。このように、短歌の虚構や「わたくし」性への疑問については、古くて新しい問題であることがわかる。

短歌等の作品を読むときは、ぜひこの虚構（フィクション）性という点にも注目すべきだ。そして、もし事実とすればどれだけ作者がその現実にも迫っているか、作品に落とし込んでいるか、完成度はどうかを感じ取ってほしいのである。

◆「展景」一〇一号が届いたところ、池田桂一さんの訃報に接した。享年八十四。コロナ禍でもあり、家族だけで見送ったとのことだった。三十年以上、一緒に活動してきた仲間であるが、最期に会うことは叶わなかった。

思えば「展景」は手作りそのものだった。集まった原稿をわたしがワープロで打ち出し、池田さんに郵送。製本技術をもつ池田さんがコピーし、製本を担当してくれた。池田さんの住まいが埼玉県川越市から福島県の伊達市に移ってからも、しばらく続いたように思う。池田さんが生まれ故郷の福島へ行ったのは、一人暮らしの九十年代のお父さんをサポートするためだった。ほかにもご兄弟がいたはずだが、面倒見のいい桂一さんが名乗りを上げたのは必然であつたらう。福島ではさまざまに活動に関わり、地元の人に頼りにされていたようだ。福島での生活は一時的と思っていたが、お父さんが亡くなってからも池田さんは伊達市に住み続けた。二〇一一年三月、大きな地震と福島第一原子力発電所の事故が起きる。池田さんの住む家は、原発事故よりも地震による被害のほうが大きかったという。蔵の土台である石垣や電話の配線などは、修理の順番待ちなのか何年もそのままになり、家の電話とファクスが使えなくなっていた。展景の原稿は手紙やコンビニのファクスで送られてくる。毎月のエッセイの会・清紫会（東京・文京シビックセンター会議室）にも新幹線を使って参加。ほんとうに熱心で、仲間を大切にしてくれたいという思いがある。歌人・上田三四二の法要の折、バスで隣り合ったことから意気投合し、布宮みつこ（故人）と池田桂一さんとの同人誌の旅は始まった。あれこれ思い出は尽きないが、「展景」の前主宰者である叔母みつこに代わって、これまでのお礼を申し上げる。池田さん、どうか安らかにお休みください。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊展景
102号

二〇二一年七月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二―一―七―二〇二

info@muninokai.com